

完全調和としての光の世界

—臨死体験に関する I 考察—

齊藤忠資

臨死体験の光の世界は、完全な状態であり、完全に調和した状態であるといわれている。この点についてここでは考察してみたい。

- ① 臨死体験の光の世界は完全な状態にある。「光の世界は完全であった。」¹⁾ 「光は全くの完全感を備えていた。」²⁾
- ② 完全な状態と言うのは、すべてものが本来あるべき状態にあるということである。「すべてはあるべき様であった。完全であった。」³⁾ 「すべては完全で、すべては本来あるべき状態にある。」⁴⁾ 「光の中には愛と安らぎがあり、すべては本来あるべき状態にあった。すべては完全であった。」⁵⁾ 「すべてがOKで、あるべき様に正にあった。」⁶⁾ 「この上ない安らぎと喜びを感じた。すべては本来あるべき状態にあった。」⁷⁾ 「天界に完全さを私は感じた。」⁸⁾ 「光の美しい園は細部まで完全だった。」⁹⁾
- ③ 光の世界が完全であるということは、欠陥や欠けているものやネガティブなものがないということである。代表的例を挙げよう。

「私には必要なもの、欠けているものはない。」¹⁰⁾

「超自然的大都市は、完全で欠陥がなかった。」¹¹⁾

「光の世界では、色は完全で、ものと場所には欠陥がない。乱れもない。どの花も完全で腐っていなかった。」¹²⁾

光の世界には、ネガティブなものは何も見られなかった。すなわち恐れ、欠乏、不安、空腹、腐敗、憎しみ、怒り、痛み、人種と宗教による偏見、嫉妬、病気、暴力、その他の人間の苦しみは全てなかった。」¹³⁾

「光の世界には、無秩序や死や闇や混乱はなかった。」¹⁴⁾

天には怖れと闇はなかった。」¹⁵⁾

「私は痛みと苦しみから解放された。」¹⁶⁾

「光の愛の中では、ごまかしやあいまいさは全くなかった。」¹⁷⁾

「光の世界では病気の植物を見なかった。」¹⁸⁾

「光のシティには、車はなく、汚物やごみもなかった。」¹⁹⁾

「光の世界には、工場や騒音や悪臭はなく、車もなかった。」²⁰⁾

「何も秩序から外れているものはない。雑音やくずやごみはどこにもない。」²¹⁾

「光の世界では、花は成長する必要はない。花には養分を取るための茎がない。」²²⁾
- ④ 臨死体験者の肉体から解放された自己のコアは、光と一体となるが、その光の世界は完全に調和していたといわれている。典型的な例を引用しよう。

「私は光と一つになったかのように感じた。すべてが突然意味深く思われた。この光の世界全体が完全なハーモニーの中にあるように見えた。」²³⁾

完全調和と言うのは、オーケストラの音楽のように個々の音色が違っていても、バラバラにすることができない仕方で、一つの全体として一体になっている状態を意味する。個々の音色は独自性を持ち分節できるが、アイデンティティは全体にある。具体的には振動する波のコヒーレンス、共振、同調が考えられる。宇宙は多次元の振動するエネルギー場である。場の中に場があり、ホールルキーを構成している。意識も振動するエネルギー場であり、光の存在(個)は場の焦点であり自由に場を移動できるものと思われる。物質宇宙には電磁波スペクトルの場が遍在していて、無数の振動数帯域がバラバラにできない仕方で、一つの全体として一体をなしている。その電磁波の一部を人間の目は可視光線として同調することができ、可視光線の振動数の違いによって目の網膜の3原色が7色を生み出すが、7色を一つにすると光は無色透明になる。(空の光) 7色を生成する振動数の違いは、光としてバラバラにできない仕方で、一つの全体として一体であるためである。コヒーレント光はホログラムになる。量子のコヒーレンスは見えない波の干渉性であり、波動関数はすべての個がバラバラにできない仕方で一つの全体として一体になっている状態にあり、完全に調和している。この見えない波の干渉性が消失すると(デコヒーレンス)、完全調和は乱れ、個がバラバラになり、完全調和の全体性が崩壊する。代表的な例をあげよう。

「光の世界ではすべてが振動し、すべてが調和していて、何一つこの調和から外れていない。」²⁴⁾

「光の世界では全面的に秩序があり、少しの調和の乱れも感じなかった。」²⁵⁾

「合唱のハーモニー、様々な言葉の完全な融合。すべての言葉を理解できた。私は普遍的な体験の部分であった。行きたいと思う所に瞬時に行けた。テレパシーで思いが通じた。我々は皆普遍的な波長であった。」²⁶⁾

「天上の音楽は完全に調和していて、雑音はなかった。」²⁷⁾

「光の世界には完全に調和した音楽があった。」²⁸⁾

「その時私はこの世のものではない音楽を聞いた。まるで私を普通の私から超越した存在に昇華化させるかのようなのだ。それは素晴らしい美のハーモニーを作り出す、目に見えない星から奏でられているようだ。47年後の今でも、まだ私の心に聞こえている。とても美しく調和のとれた音楽でした。同時に私は柔らかくて輝いた光を見た。その瞬間私は宇宙と一つになった。私は宇宙の調和と美を体験した。」²⁹⁾

「私は光と共にすばやく移動し、あるところで止まった。無数の声とハーモニーの歌を、愛と美の歌のように聞いた。私も一緒に歌った。すべては私のメロディーになった。エクスタシーに達した。」³⁰⁾

「ハーモニーと美がすべてのものを形成している。」³¹⁾

「永続するハーモニーと幸福があるのを感じた。」³²⁾

「すべては調和していて、完全で素晴らしい音楽の様だった。」³³⁾

- ⑤ オーケストラの音楽から分かるように、完全に調和しているということは、すべての音色が全体として一つに統合されているということである。(不可分の全体) 全体として欠点や欠如がないという意味で全体性は完全性を意味している。(holy)

典型的な例を引用しよう。

「私は光の中に溶け込み、全体になった。私は自分が完全になるのが分かった。」³⁴⁾

「無条件の愛の光を浴びて、私は光になった。私は完全だった。私は同時にすべてのものになった。」³⁵⁾

「私はいかなる感情からも解放されて、完全になり全体になった。」³⁶⁾

「すべてはあるべき状態にあった。すべてのものが一つの存在となっていた。」³⁷⁾

「園の花・草木など全体が歌い音楽を奏でている。園は光によって完全で、色も完全に調和している。色は振動し完全で全体性をなしている。」³⁸⁾

「この光の本体から無数の光の一部が出たり入ったりしている。その部分なしには、光の本体は全体ではないという意味で、我々は光である。この光の本体と一つになると、完全なハーモニーになった。」³⁷⁾ この例では光の本体は不可分の全体として一つになっていて、光の統合的全体意識になっていて、我々は光の本体の部分(メンバー)であることを示している。

「光は完全であり、全体性であり、存在そのものであった。」⁴⁰⁾

「情報はまるである種の調和を完成させる最後の段階であるかのように、私を襲った。私はその調和の一部である。私は過去に存在し、将来存在するすべてを理解した。私は完全であった。私は安らぎの最高の存在だった。私はただ存在しているのみであった。私は万物の一部だった。私は万物の内に存在し、形はなく、存在の一つの完全な状態だった。」⁴¹⁾ この例は臨死体験者の自己コアが万物と一体になり、不可分の全体の構成要素となる時、完全な存在になることを示している。

- ⑥ 完全調和は音楽以外では美しさや色やデザインやパターンなどにもみられる。

「光の世界ではすべてのものが完全であった。花全体が光の様々な色合いで満たされていた。その美しさは信じがたい。」⁴²⁾

「光の世界の荘厳な見事さと色と美しさは人間の理解力を超えている。完全な無条件の愛と理解のみがあるハーモニーが見られる。すべてのものは完全であり、そこはホームであった。」⁴³⁾

「この物質界では経験したことのない色と、完全に調和した音楽とデザインが見られた。この色とメロディーとデザインのハーモニーは光から生まれる。」⁴⁴⁾

「光がすべてのものを焦点として照射している。生きているすべてのものは、独自の色と幾何学的パターンと音を備えている。色も音も地上のものよりはるかに多い。色が聞こえるかのようだ。光と音と色と幾何学パターンは皆結合して、調和した完全さを全体として形成している。」⁴⁵⁾

「生きている光が地上では見た事のない色を出している。色は多くのオクターヴをなしている。複雑な幾何学的なパターンによってアレンジされ、色とパターンは溶け合って音になる。音の無数のオクターヴが重なり合ってメロディーとなる。すべての生きているものの音によってそれは作られている。光と音と色と幾何学的パターンの全てが、全体を調和した完全へと統合している。それは存在と美と喜びと調和した完全な世界である。」⁴⁶⁾

「明確な形と運動とともに、全体は色と音楽と同時に調和してともに展開された。」⁴⁷⁾
光の世界は完全な世界である。完全調和は、完全な慈しみ、完全な安らぎ(ホーム)、完全な美、完全な喜び、完全な意識、完全な自己、完全な知覚、完全な情報などとの関連でさらに考察される必要がある。プラトンは完全な世界(アイデアの世界)を探求したが、幾何学に重点があった。

註

- 1) S.S.Farr, What Tom Sawyer Learnd¥ed From Dying, Hampton Roads Publishing Company, 1993, 39
- 2) C.Zaleski, Otherworld Journeys, Oxford University Press 1987, 125
- 3) J.Antonette, Whispers of the Soul, 32
- 4) www.nderf.org/linde-s-probable-NDE2903.htm
- 5) www.nderf.org/crystal-m-nde.htm
- 6) K.Williams, Nothing Better Than Deasth, Xlibris Corporatrion, 2002, L.Stewart
- 7) www.nderf.org/lynn-nde.4972.htm
- 8) D.Piper, 90 Minuts in Heaven, Revell, 2004, 33
- 9) www.near-death.com/goines.html
- 10) D.Piper, 90 Minuts, 33
- 11) www.nderf.org/brain-t's-nde.htm
- 12) www.nderf.org/susan-a's-nmde.htm
- 13) www.nderf.org/steve-b's-nde.htm
- 14) C.R.Lundahl & Widdison, H.A., The Eternal Journey, Warner Books, 1997, 172
- 15) <http://celestical.kucriakon.com/nde/rudi-rudenski.htm>
- 16) www.nderf.org/chen.m-nde.htm
- 17) N.Clark, Hear His Voice, Publish America, 2005, 64
- 18) www.near-death.com/McCormack's_nde.htm
- 19) S.L. Menet, There Is No Death, ountain Top Publishing, 2002, 36
- 20) Ch.Stein, Like an Angel, Weimarar Schiler Presse, 2006, 54.56

- 21) L.E.Tooley,I Saw Heaven! Horizon Publisher's & Distributors,1997,86
- 22) R.Wallace,The Burning Within,Gold Leaf press,1994,102
- 23) K.Ring & E.Elsaessa-Valarino,In Angesicht des Lichts,Hugendubel,1999,28~29
- 24) www.nderf.org/alejandro-m's-nde.htm
- 25) www.nderf.org/jack-c's-probable-nde.htm
- 26) B.Malz,My Glimpse of Eternity.Chosen Books,1977,86~87
- 27) M. モース、臨死からの帰還、徳間書店、1993, 118~119
- 28) www.nderf.org/n.t.f's-nde.htm
- 29) I. カーリー、あなた八死なない、PHP, 1998,218
- 30) www.lovinglight.com/darlene/mysong.htm
- 31) L.E.Tooley,Heaven,86
- 32) www.nderf.org/chen.m.-nde.htm
- 33) R.Wallace,Burning,110
- 34) B.Harris,Full Circle,Pocket Books,1990,210
- 35) K.Ring,Lessons From The Light,Insight Books,1998,46
- 36) www.nderf.org/kristin-d's-nde.htm
- 37) www.nderf.org/lynn-nde.4772.htm
- 38) R.Wallace,Burning,101~102
- 39) www.nderf.org/james-t's-nde.htm
- 40) www.nderf.org/mike-y-nde.htm
- 41) www.nderf.org/burke's-nde.htm
- 42) R.Wallace, Burning,101~
- 43) www.nderf.org/steve-B7s-nde.htm
- 44) K.Ring,Lessons,295~296
- 45) www.well.com/use/bobby/mystical/beyond-and-back.htm
- 46) www.near-death.com/star.html
- 47) S.v.Jankovich,Die energetische Struktur des Menschen,Drei Eichen Verlag,1900,41~42